



Title	フランク・ロイド・ライトの思索と制作 : ライトの窓 その変容の意味
Author(s)	水上, 優
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 120-121
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56376
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランク・ロイド・ライトの思索と制作 — ライトの窓 その変容の意味

水上 優／兵庫県立大学環境人間学部環境人間学科

ライトの思索と制作の連関を、「窓」を手掛かりに見ていきたい。ここでは、プレイリー・ハウスからユースニアン・ハウスへの変容の事態を軸に窓の変容を概観し、同時期の思索の変容と重ね合わせることによって、かれの思索と制作の主題を考える。

1. ライトの窓の変容

プレイリー・ハウスの窓は、そのアートガラスの素晴らしさで知られる。最初期には透明ガラスだけが用いられ、菱形や単純な図形を反復させたものであった。直線によって構成される独特なアートガラスが窓として住宅全体に展開されたのは、ヘラー邸（1896）（図1）辺りからである。以後プレイリー・ハウスでは、各住宅に固有のアートガラスがデザインされる。ブラッドリー邸（1900）のように平面ガラスを縁取るようなデザインのものや、リトル第2邸（1912）のように複数のアートガラスが連続する構成もあった。多くは幾何学的に構成された抽象的なデザインであったが、ダナ邸（1902）の「漆の木」（図2）のようにモチーフが明示されるものや、D.マーティン邸（1904）の「生命の木」のように、特別に名付けられたものも

あった。

いわゆる「第1黄金時代」の後、彼は西海岸に4件のコンクリートブロック・ハウスをデザインしているが、このうちアートガラスを用いるのはエニス邸のみであり、またこれがアートガラスの最後の作品となった。この時期に登場した特徴的な窓のデザインの1つは、デザインされたブロックに穿たれた穴にガラスが嵌められたものであり、もう1つは、ストラー邸における、方立なしで直角方向に突き合わされた板ガラスによるコーナーウィンドウである。前者は採光窓として、後のユースニアン・ハウスの打ち抜きパネルに繋がるものであろう。後者は住宅の隅部を解放するデザインとして、彼のいう「箱の解体」のコンセプト（図3）を表現している。

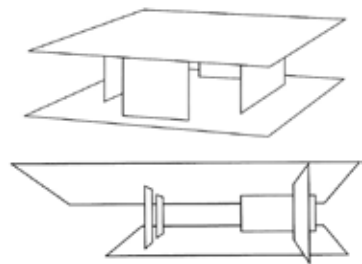
上述のコーナーウィンドウは、プレ・ユースニアン・ハウスとも言うべきウィリー邸（1933）で、決定的な変容を遂げる。すなわちキッチンと寝室のコーナーウィンドウ（図4）には方立がなく内部と外部が解け合うような不思議な空間を現象させる。このスタイルの開き窓は、落水荘（1935）（図5）以降のユースニアン・ハウスにたびたび採用され



【図1】ヘラー邸



【図2】ダナ邸



【図3】箱の解体 "An American Architecture,"
Horizon Press, 1955

ている。独特な幾何学図像を打ち抜いたパネルはハナ邸（1936）以降多くのユーソニアン・ハウスに採用される。穴開きコンクリートブロックの窓も、ジーマン邸（1950）のように、煉瓦造壁に組み込まれて用いられた。以上のような特徴的な窓以外は、ユーソニアン・ハウスの大部分の窓は板ガラスである。「箱の解体」コンセプトに言われる「箱に開けた穴」としての垂壁腰壁両付きの開口はほとんどなく、天井から床まで、天井から腰壁まで、という窓である。

2. ライトの思想の変容

プレイリー・ハウスが設計された第1黄金時代の制作論的主導概念に「様式化 (conventionalization)」がある。彼は1908年の発言で、様式化によって建築は住宅内部の人間の営みの背景、枠組みとなり、住宅外部の自然の営みに呼応する、と述べる。「内 (within)」と「外 (without)」の対比において、建築はその間で両者を繋ぐ役割を担うのである。

建築の意味を規定するこの「様式化」概念は、しかし、1928年の記述以降ほとんど用いられなくなり、ユーソニアン・ハウスの時期になると、両者を結びつける概念は「スタイル (style)」に変わる。『スタイルは今や建物そのものに自然な質である。スタイルは内より発展する。』(“A Testament,” Horizon Press, 1957) と言われる。両概念の違いを端的に言えば、「様式化」は「内と外」の関係

をいう概念であり、暗黙のうちに自然を「外」として措定しているのに対して、「スタイル」概念は「内」を全ての始まりと捉え、人間も自然も建築も、あらゆるものは「内から外へ (from within outward)」成長すると捉えている。前期において、様式化概念のもとで (外なるものとしての) 植物の外形を抽象化したアートガラスは、スタイル概念が主導する後期には、用いられなくなるのである。

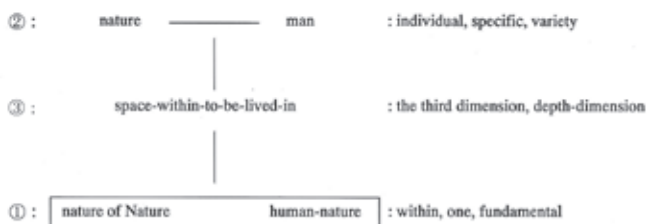
3. 変容の意味

プレイリー・ハウスからユーソニアン・ハウスへの窓の変容はその時期のかれの思想の変容に重ね合わされることによって、かれの制作態度の変容として解釈される。「内」を巡るライトの思索の構造を図式化すれば図6のようにならうか。第1黄金時代の制作態度は図中②から①への移行として、すなわち自然と人間とが分かれている次元から両者が不可分に一体となっている内なる次元への移行として解釈されるのに対し、第2黄金時代のそれは①から②への移行として解釈される。そこでの枢要の論点は「内」が初発の次元として捉えなおされていることである。ここにおいてライトの言う「内から外への建築 (architecture from within outward)」が成立する。そこでは窓は内と外の間で両者をつなぐものではなく、内から外への空間の空け開けを妨げることのないスクリーンとして、捉えられているのである。



【図4】ウィリー邸

【図5】落水荘



【図6】自然に倣う建築のあり方の構造 (筆者作成)